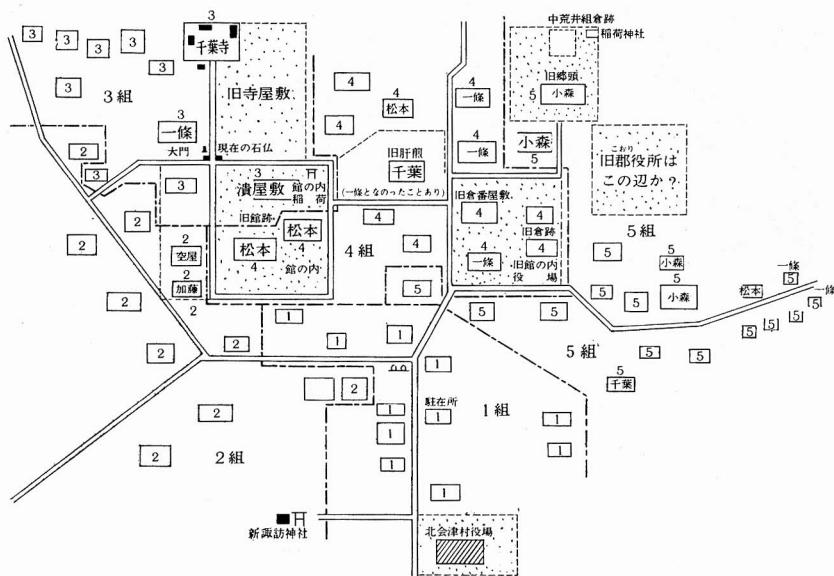


中荒井村見取図



まどの間に二〇のひらきがあり、当時は一般に女の人口は低かったが、それでも五〇人の開きは大きい。やはり中荒井組の中心部落としての役割、繁栄の何かがあったことを思わせる。文化六年（一八〇九）にはそれが五一戸に減り、明治八年（一八七五）にも五三戸とあまりふえていない。これが近年再び増加の傾向にあり、昭和四十二年当初に六七戸にまでなっているが、寛文の戸数にはまだ達しない。

新編風土記にはさらに、村東に郡役所があり、郡奉行のいたことが記してある。そして「南青木組飯寺村、高久組高久村、坂下組坂下村、高田村の代官これに隷す」とある。あまり永い期間ではなかったと思うが、会津盆地のほぼ中央を占める地理的位置が、一時、中荒井組だけでなく、もっと広い地域の政治の中心に充てられたこともあったらしい。

中荒井組を担当する代官のいたことのあるのは